

哲学研究 と 看護学

— 看護の学はいかにして学たりうるか —

徳島大学大学開放実践センター

野島良子

司会 京都大学医療技術短期大学部

近田敬子

哲学から看護学への贈物

真理を探求するには生涯に一度はすべてのことについて、できる限り疑うべきである¹⁾、というデカルトの言葉をよりどころにして、看護の学がいかにして学たりうるか、という課題にアプローチしてみようと思う。看護科学はナイチンゲール以来、看護とはなにかという問いを問いつづけてきた、と私たちは信じている。はたしてそうだろうか？看護学と呼ばれる分野で、私たちは、真理をその最初の原因から認識する²⁾、作業をすすめてきただろうか？一度、看護学の態度を疑うところから出なおしてみよう。そうすれば、すべてを疑え、そして、すべてを疑ってのち、尚真なるものとして在るもの、それが精神である³⁾、というデカルトの命題も、人間を心身の統合された Total な存在として認識することを既に了解している現在の看護科学にとって、悪しき命題になるどころか、このうえない貴い贈物になるのではないか？

知恵に到達する道

デカルトは知恵に到達する道を5つの階程に分けて考えている。第一の階程は、「何の省察もなくしても得られるほど自明的な概念だけを含む」もの。第二の階程は、「感覚の経験が知らせる一切」のもの。第三の階程は、「他人との談話が我々に教える」もの。第四の階程は、「読書」。なぜならば「我々によき教えを与え得る人物によって書かれた書物を読む」ということは、「著者との間にもつ談話」に等しいから。しかしここまでは真理の追求とはあまり関係しない。デカルトも述べているように、誰でも、日頃このような方法で知恵を得ている。いま、ここで考えてみたいのは第五の階程である。デカルト流に言えば、そこから

我々が知り得るあらゆるものの根拠を、導き出し得るものになるもの⁴⁾、についてである。

看護理論の歴史を振り返ってみると、Nightingale 以来130年間、看護とはなにか、という問いが専ら追求されてきた。戦後最初にあらわれた学派としての、Henderson に代表されるニード理論は“看護とは何か”を説明し、次に登場した相互作用理論派は看護を“どのようにするか”を説明した。このような What や How の理論のおかげで、私たちには看護というものの姿や働きがかなりはっきりと見えるようにはなってきた。けれども、私たちはいま、クライアントをケアするとき、なぜそうするのかを誰にでもわかるように説明できるだろうか？こうすればあのような結果が得られるはずであると、正確に予測できるだろうか？それらを説明したり予測する時に、誰が使っても同じ意味を伝えることができる言葉を、もっているだろうか？そして、看護学は、看護学固有の、と呼び得る知識を生みだすものを、いったい何処に、何に求めればよいかを、誰か知っているだろうか？

私たちが追い求めてきた、看護とはなにか、という問いには2重の意味がある。1つは看護者が、何を、いつ、どこで、どのように、することが看護なのかという処方箋を書くこと。もう1つは、看護に関する一切の事象を根本原因にまで遡って記述したり、説明したりするために、“根本的な考え方の一般的な体系”⁵⁾を示すことである。そしてこの第2の意味の追求が看護の哲学の仕事ではないか。

現代看護学の位相

ここで科学と哲学の関係を整理しておこうと思う。科学も哲学も共に知を愛する、共に真理を探求する。

Ayer という哲学者は両者の違いを、扱う対象や素材の相違ではなく、真理に迫る方法の相違に見だしている⁶⁾。具体的に言えば検証可能性ということである。ある命題の真偽を検証するときに、科学は観察によって検証していくが、哲学は与えられた命題が真ではないと思われる場合、論理によって反証していく。これが基本である。ところで現代看護学の状況についてであるが、看護学は他のいわゆる正常科学と呼ばれている諸科学からみれば、まだ何ほどの歴史があるわけではない。けれども、80年代に入ってからの看護理論をみてみると、それ以前のように新しいモデルを次々に提唱していくよりも、2つの方向をとって、既存の理論の整理を始めている。2つの方向というのは理論の統合と理論の検証である。アメリカの看護学の発達史にそう形で、ニード理論から相互作用理論へ、相互作用理論から目的理論から目的理論へとすすむ中で、看護とはなにか、看護をいかに実践するか、看護の対象となる人間とは誰(なに)か、が説明されてきた。理論が一通り出尽くした段階では、今度はそれらを検証しようという動きが現れてくるのは当然かもしれない。しかしこの動きには別の見方ができる。つまり論理実証主義の影響を強く受けて発展してきたのがアメリカの看護理論であるとすれば、既存理論の検証は新しく進むべき方向の模索として現れたのではなく、理論構築の過程に沿えば当然踏むべき次の段階として予定されていた作業課題だと考えられる。現在アメリカの看護理論研究の中心にいて活動している Meleis は、「理論検証は静的過程でもないし、最終産物でもない。力動的な検証過程は理論構築と共に始まり、さらなる理論構築とともに継続していく」⁷⁾と述べている。看護理論の構築は検証の原理に支配されているのだといえないこともない。Meleis は理論検証の構成要素として、分析、批評、検証という3つのプロセスを確認したうえで、看護における理論検証を、1) 有用性の検証、2) 借用命題の検証、3) 関連命題の検証、4) 看護概念の検証、5) 看護命題の検証、の5つのカテゴリーに分けている⁷⁾。これら5つの検証カテゴリーの中で看護科学者が最も重視しているのが、有用性の検証である。Meleis の言葉を借りると、理論使用の実現性を見いだすこと、である。その理論は看護実践、研究、教育、看護管理の中で果して使えるのかどうか、と。

看護学のイドラ

看護科学はもともとより優れた看護実践を提供するためにあるわけであるから、看護科学者が看護理論の有用性の検証を第一義的に重要視するのは当然かもしれない。しかし、私たちはここで疑ってみよう、実践を前提にしないで、知識の起源をたずねることや、知識を体系化することを専らにする傾野があってもいいのではないかと。17世紀のイギリスの哲学者フランシス・ベーコンは、人間の精神は、種族のイドラ、洞窟のイドラ、市場のイドラ、劇場のイドラという4つの虚想に占有されていて、これらが私たちが真理に到達するのを妨げるという⁸⁾。私たち看護の市場にたむろしている人間は、誰もかれも実践ということを第一に考えていて、市場で人に出くわすと挨拶代わりに「実践のために」と言う。けれども実はこの考えは、私たちの精神に深く巣くっているイドラではあるまいか。

ある命題が真であるか、偽であるかを知るということは、真理を発見することを第一の目的にしている。そして、これは、ある現象について、一定の条件のもとで観察をすれば、ということを経験にしている。それも個々の現象から始まって、最も低い命題へ、次いで中間的公理へ、そしてさらに上位の公理へ上り、最後に最も一般的な公理へと、ベーコンの「正しい梯子」を順序よく登りつめるという、一般に帰納法と呼ばれている方法によってである。ところが看護理論、とりわけグランド・セオリーのような理論の有用性の検証は、一定の条件のもとで観察して、ということにはならない。実際にとりうる方法としては、せいぜいその理論の有用性や影響範囲を、明晰性の程度や単純性の程度に照らしあわせながら、批判的に分析することになる。つまり真か偽かという基準は看護の理論の有用性の検証にはそぐわない。ある命題が真である、ということは、事実と照らしてみてもその事実と一致しているということであるとすれば、看護の場合、事実なるものは1つではない。少なくとも見積ってもクライアントにとっての事実と、看護者にとっての事実とがある。どちらの事実と一致しているときに、その命題は真である、と言えるだろうか？

看護の理論では検証という考え方は、少なくとも、ある命題を実際にある条件のもとで事実と照合して見る、という意味においては、成り立たないということ

きるのは、検証ではなく、確証である。つまり「かくかくの一連の事象を観察すれば、その命題が確証されるということを知っており、またそれとは異なったしかじかの一連の事象を観察すればその命題の否定が確証される」⁹⁾ことを知っていること。もともと検証ということがあてはまらない現象が看護であるのに、ロジャーズが述べているように、看護の概念体系の内容さえ豊かになれば、知的な看護ができるようになる¹⁰⁾、と皆が素朴に信じ合って、何か手本になるものはないかと一所懸命に辺りを見回したとき、そこにいかにも科学的な香りを放っている検証の論理をふりかざした論理実証主義があった、ということではないか。

認識論から存在論へ

私たちは看護学に関して、「基本的な考え方の一般的な体系」をうち立てようと試みるとき、イドラを捨てて、実践に直接結びついた知識を求める学と、知識を知識として求める学とを分けて考えたほうがよさそうだ。さしあたって前者を看護実践学、後者を看護学と呼んでおこう。ところで論理実証主義の傘の下では、看護理論の目標はつまるところ、検証可能な仮説の明確化¹¹⁾、ということになるが、この図式で研究者と研究される事象、見る人と事象、看護者とクライアントの関係をみると、そこからはいうまでもなく、主観—客観、看護実践者—対象という対概念がでてくる。見る人は事象からできるだけ遠く離れて観察する、生の経験から十分に離れる。看護実践の場合には、看護する人は“対象”に“働きかけて”特定の変化をもたらす、これが基本的な図式になる。ところが、看護科学が研究の対象にする素材は、ベーコン流に言えば、星や磁気などという「自由で縛られない」素材ではなく、「強いられて縛られた自然」¹²⁾ばかりであるといえる。そのうえ、人間はみなひとりひとり違う。主観—客観、確率、単一性という概念よりも、多様性、相対性といった概念の方がよく以合うのである。看護において、仮に研究者や理論家のように知識の体系を形づくってゆくことを仕事としている人々を認識の実践者と呼ぶと、看護実践者の認識と認識の実践者の認識との間には本質的な相違はない、といえる。両者は同じパターンをもっていると言える。観る主体も見られる客体も、共に“社会的場”の中に含まれてあるものとして、対象界を見る¹³⁾。見る主体は同時に見られる客

体である。このような図式のなかで全体的な存在としての人間を知ろうとすると、その間は、“人間とは何であるか？”から、“人間はどのように在るか？”という問に変わらざるを得まい。こうゆう理由で、Bennerは¹⁴⁾今やまったく新しい人間の見方—人間研究の学が構築されなければならないという。彼女は、私たちは単に心身が統合されてある存在であるというばかりでなく、自己がおかれてある状況に意味を見いだす存在、つまり、自己が“そこに”“おいて/in”“在る”ことに意味を見いだす存在だと考える。この意味というのは、現実としての自己の環境世界と自己とを結びつけているところの関係といってもよい。人間各個人は自己の身体をとうして、この関係をすばやく了解するのである。Bennerは従来の論理実証主義から抜けて、ハイデッガーとメルロ・ポンティを基層において現象学的存在論の立場を鮮明にしながら、看護科学における真の知識の起源を、クライアントと共に在る「私」に求めようとしているといえる。看護学の新しい務めは人間ひとりひとりが健康や病気を生きる際の、“生きられた経験 (the lived experience)”を記述することだと言える

(本講演は服部朝子氏(愛知県立看護短期大学)との対話によってすすめた。)

文 献

1. デカルト, 桂 寿一訳, 哲学原理, 岩波文庫, 1647年, 昭和39年
2. デカルト, 同上
3. デカルト, 同上
4. デカルト, 同上
5. ジャック・ブーヴェレス, 論理実証主義の科学哲学における理論と観察, 中村雄二郎監修訳, ショクトレ哲学史Ⅷ, 二十世紀の哲学, 白水社, 1975
6. Ayer, A. J., The Problem of Knowledge, Penguin Book, 1956
7. Meleis, A. I., 野嶋佐由美, 野嶋良子訳, 看護における理論検証: 概念的・経験的検証過程, 臨床看護12(6): 837-846, 1986
8. フランシス・ベーコン, 桂 寿一訳, ノヴム・オルガヌム, 岩波文庫, 1978
9. ジャック・ブーヴェレス, 同上

哲学研究と看護学

10. Rogers, M. E, 樋口康子, 中西睦子訳, ロジャーズ看護論, 医学書院, 1979
11. Rogers, M. E., 同上
12. フランシス・ベーコン, 同上
13. 野島良子, Human-Caring と看護
- 看護に学はどこに成り立つか -
14. Benner, P. and Wrubel, J., The Primacy of Caring, Stress and Coping in Health and Illness, Addison-Wesley Publishing Co., Menlo Park, California, 1989